

日本社会党青年部再考

『NO! 9条改憲・人権破壊』（明石書店、2007年）をもとに

——高見圭司氏に聞く（下）



——たいへん基本的な質問で恐縮なのですが、社会党青年部、社会党青年対策部、社会党青少年局、社会主義青年同盟。社会主義青年同盟は、どういう関係にあったのでしょうか。

高見 社会党青年部が途中でどこで対策部が変わったか分かりませんが、私が副部長になったときは300人の代議員が来て選挙ですから、大変な論争があります。西尾末広（1891～1981年、日本社会党結成の中心人物）除名とか。

——それは青年部の大会ですよ。

高見 青年部の大会です。非常に厳しい論争がある。西尾を除名するかどうかという闘いでしたから。私も西尾除名に賛成する立場で主張していました。だから、青年部の副部長という点では、佐々木派の青年部の諸君も私を支持する。青年部の副部長は選挙のときに3人立候補しました。1人は西尾派から出る。これは海員組合出身の人でした。もう1人は、平和同志会の人が出られた。

私は河上丈太郎派と佐々木更三派との連合で推された。主流派同士で僕を推すわけです。だから、選挙をやっても圧倒的に僕が勝つことは

分かっている。これは浅沼さんたちが「高見を副部長にするから」と言って、お互いに決めたのだと思います。それで3人立候補し、ついに最後には平和同志会の人と西尾派の2人が降りるのです。私が残るから当選してしまう。そういうことです。投票なしで当選してしまった。これが社会党本部の専従の始まりです。

——青年部から青年対策部が変わったのはいつですか。

高見 どうなんでしょうね。

——名前だけではなく、組織的な性格も変わりますよね。

高見 組織的性格は恐らく、社青同結成によって変わったのだと思います。共産党は共産青年同盟とかいろいろあったのだと思います。共産党系の組織として民青がつくられます。「社会党の場合、社会党青年部ではまずいいのではないか。やはり民青のように大衆組織をつくるべきだ」という意見が指導部の中であつたようです。それで社青同をつくることになった。

特に、青年部をつくるときの理論的指導者は清水慎三（1913～96年。社会党中央執行委員、信州大学教授等を歴任）さんです。綱領が三つばかりあり、一番重要な綱領は、「反独占社会主義を目標とする」という路線を提示します。これは清水慎三さんの思想です。これが社会党の社会主義青年同盟の綱領の中心軸で清水慎三さんが指導しています。裏でね。清水さんは総

本稿は、2014年1月26日（日）に、法政大学市ヶ谷キャンパス80年館7階、「中の1」会議室にて行われた、第11回社会党・総評史研究会の記録である。事前に高見氏に送付した質問に答えていただいた部分と質疑応答の一部（前号）、質疑応答（今号）とに分けた。（木下真志）

高見圭司氏への質問事項

— 『NO! 9条改憲・人権破壊』*を中心に—

1. 早大「新建設者同盟」は、32頁(『NO! 9条改憲・人権破壊』の頁。以下同じ)の記述と写真を見る限り、右派の色彩が相当強かったようですが、その後早稲田解放派の核になっていくとのこと。この「左旋回」はいつどのように起こったのでしょうか。そこに高見さんご自身はどのようにかかわっておられますか。

2. 1955年から社会党文京支部書記として活動しつつ、砂川闘争**に参加しておられます。前後の記述を読む限り、この時点では高見さんご自身は右派人脈とのつながりが強いようですが、にもかかわらず砂川闘争に積極的に参加するに至ったのは、何かきっかけがあったのでしょうか。

3. 「社会党青年部」「社会党青年対策部」「社会党青少年局」「社会主義青年同盟」の組織的關係を整理してご説明いただけますか。

4. インターネット百科事典 Wikipedia の「社青同解放派」の項目には、「1960年2月27日 日本社会党本部2階で日本社会主義青年同盟学生班協議会の結成が行なわれる。(これは前年来、早稲田大学を中心として活動してきた、東京社会主義学生会議が、社青同の組織に発展的に転化したものである。)」とあります。この記述は正確でしょうか。また、高見さんはこの動きにかかわっておられましたか。

5. また同じく Wikipedia の「高見圭司」の項

目には、「1957年：社会党中央本部青年部副部長に就任。党内では江田派に属したが、党内に非公然フラクション「高見派」を作る」。との記述がありますが、事実でしょうか。41頁には副部長選出は58年4月とありますが。

6. 解放派への正式参加は、99頁では社会党除名後の1970年とのことですが、高見さんと解放派との関係が対立から近しいものへと変わるのはいつ頃のことでしょうか。

7. 雑誌『根拠地』は財政的にはどのように支えられていたのでしょうか。社青同や反戦派以外の社会党員や党幹部にも支援者がいたのでしょうか。

8. 105頁で、70年の「反戦パージ」は69年末の総選挙敗北を受けてのこととありますが、高見さんら反戦派を排除するという組織方針は選挙後急速に出てきたものでしょうか。それともその前からほぼ形成されていたものが、選挙総括を口実に具体化されただけなのでしょう。

9. 新運転加入の経緯について

* 高見圭司著『NO! 9条改憲・人権破壊—反戦青年委員会をつくった軍国少年』明石書店、2007年5月

** 1955年、米軍立川基地の拡張計画が明らかになり、当時の砂川町(現東京都立川市北部)の農家ら住民が反対同盟を結成。警官隊とたびたび衝突し、56年10月には1千人を超す負傷者が出た。米軍は68年に、国も閣議で69年にそれぞれ計画中止を決め、立川基地は77年に全面返還された。(出典：朝日新聞掲載「キーワード」)

評の顧問でしたけど。それが1960年に安保闘争の中から結成されるわけです。

ちょうど安保闘争の最中に、私は安保改定阻止代表団13人の1人として中国へ行くわけです。特に、青年の代表として僕は入っていました。だから、社青同の大会に僕は参加していません。もちろん、推進する過程には関わっていますが、参加はしていない。社青同は社会党青年部の衣替えというか、そういう感じになりますかね。だから青対部というのは、「青年部では同じ組織みたいになる。社青同は大衆組織だから、そ

れに対する対策部でいいのだろう」ということだと思います。

— 「代議員を持って大会も開くような青年部は、もう必要ない」ということになったわけですね。

高見 必要ない。社青同でやってしまう。そうだと思います。

— 青年部の後見が青少年局であると……。

高見 青少年局はそうですね。青対部になったときの大会で恐らく青少年局という名前になった。青少年局の局長は執行委員です。青対

部の副部長や青年部長は執行委員ではないんですよ。これは書記局の役割ですからね。そういうことです。だから、青対部というのは執行委員ではない。執行委員は青少年局の局長になる。これは檜崎弥之助さんですね。

— 解放派の源流が社青同の学生班協議会ということになるのでしょうか。

高見 そうですね。

— 「Wikipedia」には、1960年2月27日に社会党本部で学生班協議会の結成が行われたことについて、「これは前年来、早稲田大学を中心として活動してきた東京社会主義学生会議が、社青同の組織に発展的に転化したものである」という記述があります。高見さんはここら辺の動きには何か……。

高見 あまり知らないんですよ。つまり、私は建設者同盟の中心になってやってきた。社会党に入ってから建設者同盟をどのようにするかということについては、むしろ学生たちが滝口弘人君（1934～1999年、本名佐々木慶明）のいろいろな理論を学び、やはりいいということになったのだと思います。僕はあまり指導的役割を果たしていないんです、そこは。

— では、学生班協議会の結成にもあまり参加されていないのですか。

高見 私は参加していません。何しろ、私は既に30代を越えています。学生とは10歳以上の差がありました。解放派の組織とは、私は最初からあまり近くないです。社会党から言えばね、河上派の流れだし、社青同を早稲田でつくった牛越公成君は社会党の中で言えば和田派です、勝間田派。だから2人は派閥が違うのです。でも牛越君は、社青同解放派で頑張っていましたからね。

その辺の経過については、「解放6号」というのがあります。これは、やはり社会主義の労農派支持というのです。これがまた社青同に

なったとき大激論になる。「労農派支持とは何事だ」と言って、学生の中で批判するのがあったりした。滝口弘人は労農派の流れだと位置付けたのです。歴史的にはね。それはそれでいい。そういう論争はありました。

— いま高見さんが言われた「解放6号」は、解放派の学生班協議会の機関紙『解放』6号に、滝口弘人のペンネームで佐々木慶明さんが書かれた論文、「革命的マルクス主義の旗を奪還するための闘争宣言」を指しているわけですか。

高見 そうです。

— それが原点にあたるわけですね。

高見 あれで彼らはだいぶオルグしていました。僕はその当時、そういうのをつくった文章もあまり読んでいなかったのです。僕は後で、そういう解放派の党派とは別に『根拠地』という雑誌をつくって大衆運動的に広げていましたから、むしろそちらのほうが中心でした。だから、逆に言えば佐々木君も含め、「高見を何とか自分の党派に入れたい」と考えた。共労党（共産主義労働者党。1966年設立、1971年分裂）のいいだもも（1926～2011年。本名飯田桃。小説家、評論家。新左翼運動の代表的な知識人）さんも含め、私を何とか党派に入れたいとやっていました、みんな。僕は党派で位置付けられるのは嫌いですから、従わなかった。それで解放派が1969年に、革命的労働者協会（革労協）をつくるのです。

そのときに佐々木慶明ともう1人、東京本部の詩人の石黒君というのが私のところへ来て、四谷の喫茶店で「今度、革労協をつくるから参加してくれ」と言われたけど、私は断ったのです。だから、僕は革労協に参加していません。何で断ったかという、僕は反戦青年委員会運動をまだ全国的にやらなければならない。そんな党派に位置付けられる必要はない。雑誌も出しているしね。彼らは雑誌も見ている、思想的

には僕とは非常に近いわけです。でも、「呼び掛けてくれたのはありがたいが、今の段階で僕は参加することができない」と言って拒否しました。高見が拒否したというのは、うちの今の革労協の連中はみんな知っています。

—佐々木慶明さんとは、党内でかなり共闘関係にあるというような記述があります。例えば、1963年の憲法公聴会阻止闘争というのは。

高見 これは佐々木と僕がやったのです、2人で。

—ですね。これは1963年のものですが、佐々木さんとの関係はこの前後からですか。もう少し前からですか。

高見 個人的にはその前からです。社青同の中では学対部長と共闘部長ですから、討論をしていると考え方がかなり一致している点があるし。

—社青同の仕事上というか、そういう中で。

高見 そう。社青同の中も派閥がありましてね、新左翼の党派の。だから、一つは佐々木慶明との解放派の流れ。もう一つは向坂逸郎さん(1897～1985年。経済学者)の社会主義協会派。もう一つは第四インター。それともう一つあるのが銀ヘルをかぶっていた、小野君たちがやっていた何と言ったかな。

—主体と変革派ではないでしょうか。

高見 そう、主革。こういうのがあった。僕は社青同内のこのどれにも参加しなかった。僕は専ら反戦青年委員会だけ。それで独自の雑誌を出していく。そういうことをやり通しました。だから逆に言えば、みんな「高見が欲しい」となってしまう。みんな欲しがらるわけです。まあ、共労系の人たちとマルクス研究会などやっていたから、共労系に来てくれるだろうと思っていたようです。友達はたくさんいましたが、僕はそんなふうには思っていないからね。『根拠地』をやっているとき、共労系の人たちの協

力が相当ありました。それはあつたし、親しかったのですが、党派をどうするかという点はまた全然違います。僕はそんなつもりはない。そうしたらいいだもさんが、「何であんたが俺たちと一緒にやってくれないのか」といって、原稿用紙10枚ぐらいの長い恨み節の手紙をくれました。つまらない話ですよ。

—次に5番目の質問についてですが、「1957年に社会党中央本部青年部副部長に就任。党内では江田派に属したが、党内に非公然フラクション『高見派』をつくる」という記述が、「Wikipedia」の「高見圭司」の項目にはあります。

高見 それは違うんですね(笑)。私は派閥を名乗っていませんから。ただ、「高見一派」だとか言っていました、みんな。

党内では、社会党中央本部の書記局は高見一派と言った。この一派が反戦青年委員会のメンバーで、その中には第四インターもいれば、解放派もいれば、いろいろなのがいるわけです。書記局の女性メンバーで高見派になるのがかなり多かったです。でも、自分で高見一派をつくった覚えはありません(笑)。ただ、私が中心になり、毎日ぐらい地下の資料室に集まって討論しました。もう10人、20人集まっているいろいろな討論をしました。ベトナム反戦とか。

—それが、「高見一派が集まって」と……。

高見 その連中が江田三郎(1907～1977年。日本社会党書記長)を徹夜で弾劾する集会を持った。俺は知らなかったら、若い連中が、「江田、来たーッ。突っ張れーッ！」と言って委員長室に実力で連れて行き、徹夜ですよ。

—やはり青年部の活動家を中心に、外から高見一派と言われるような勉強をしたり討論をしたりした。

高見 まあ、そう見ていたでしょうね。私の反戦青年委員会の仲間たちは、公然と独特の行

動をしていました。社会党本部の書記局の中で多数になったのです。高見一派が書記局の各局に全部いるわけですから、指導部は困るわけです。女性まで入ってきている。かつて協会派だったのがひっくり返って高見派になる。

—やはりご本人としても、「中央から何か警戒的に見られているな」という感じはしましたか。

高見 分かっているんですよ。私はもう腹を決めていました。

—そのように見られていると思われたのは、だいたい何年ぐらいからですか。

高見 そうですねえ。反戦青年委員会をつくった直後からじゃないですか。書記局でも支持するのがドーッと集まってきましたからね。僕の知らない若い諸君が反戦青年委員会に結集してくるんですよ。ベ平連（ベトナムに平和を！市民連合）をつくるのと同じです。自然に人が増えました。だから、書記局会議の中では反戦青年委員会が一番多いのではないですか。名乗らない隠れメンバーを含めて40人ぐらいいましたから。

—その中に佐々木さんは入っておられないわけですね。

高見 ええ、佐々木は書記局ではないですから。

—一応、書記局の中の何か怪しげな派閥だと見られた。

高見 そうそう。書記局の中の高見一派とか高見派とかと言われていたようです。それはだいぶ後から聞きました。書記局の女性で「私は高見派よ」と言っている女性もいたりした。それはうれしい話ですから、批判も何もしないのです。

ただ、そのときに私は、もうそういう事態になったら「赤旗」（日本共産党の機関紙。現在は「しんぶん赤旗」）にも書かれ、各派閥から

集中的に僕を攻撃してくるのは覚悟していました。僕は除名を覚悟していました。「構わない。運動を裏切ることにはできない」というので、除名覚悟でやっていました。ますます毎日、除名覚悟が強くなりました。

—江田さんとかから、「きみ、ちょっと控えたまえ」というようなことは……。

高見 全然ないです。

—江田さんは全然ないと。心配していなかったのですか。

高見 心配して彼はこう言いました。二つありますが、一つは書記局に江田さんが来て、「おーい、高見よ、おまえ、反戦青年委員会の本（高見圭司編著『反戦青年委員会』三一書房、1968年）を出したそうだな。俺のそこへ持ってこいよ」と言う。「分かりました。何冊ぐらい？」「20冊持ってこい」。あれは全国で相当売れましたから、20冊持っていったことがあります。しかも、書記局で書記長がそういうことを言うのは、「高見よ、おまえを支持しているんだぞ」と自分の立場を鮮明にするんですよ。ほかの派閥の連中はもうビクビクしているわけです。そういう構造はありました。それが一つ。

それから、本にも書いておきましたが、江田さんが社会党を辞めてから後です。先ほど言いましたように、貴島正道さん（1918～2008年）が「高見君、江田さんが心配してたよ」と僕に言った。そして彼は、「参議院全国区で俺はきみに投票したからね」と言ったのです。

その貴島さんが別の機会にこういうことを言ったのです。私が除名される前です。とにかく社会党はあのころ、こんなになっていましたからね。ベトナム反戦闘争を僕らはやるけれども、社会党本部は総評と一緒にやらないわけです。実際、実戦的に官邸に突入するなんていうことをしないでしょ、口ばかりで。ストライキをやると言ってストライキをやらない。中心

的な青年労働者は絶望しているわけです。それが反戦青年委員会に結集してくる。そういうことがあり、貴島さんが、「高見君、もううちの社会党は一定の議員団と反戦青年委員会しかないのだ。ほかにはないのだ。しっかりやってくれ」と言っていました。彼が政審の事務局長のときです。そのように貴島さんも江田さんも見ていたと思います。

江田さんは書記長だったけれども、統制委員会の決定で除名が決定した。僕は書いておきましたが、江田さんが僕の除名を指示したと思っ
てないんですよ。彼は本当に「泣いて馬^{ばしよく}諷を斬る」という思いだったと思います。

——先ほどの佐々木さんとの記述のところでは伺いましたが、1963年に憲法公聴会阻止闘争で社青同が取り組むと主張されたときに、構革派（構造改革派）の指導部は逃亡した。ここから構革派と高見さんとの関係が疎遠になったのだという記述をされています。

その後、1965年に反戦青年委員会が結成され、高見派とみなされる高見さんの影響力が書記局の中にワッと広がってきて、1963年までは構革派の一人の高見さんというような位置付けでご自身も考えておられたし、周りも見られていた。

この2年間で、反戦青年委員会にとって、また高見さんがその後、独自の政治活動へと向かうにあたって重要な期間だった。

高見 そうですね。そうだと思います。私は自分でも自覚しているのですが、反戦青年委員会をやっている過程で思想的にもものすごく変遷するんですよ。変遷と言ってはおかしいですが、やはり深まっていくというか、思想的に非常に勉強していきます。討論もする。そして、実戦で試していくわけです。やはり確信を持つわけです。そういう過程で本は非常に読みました。トロツキー（レフ・ダヴィードヴィチ・ト

ロツキー。1879～1940年。ロシアの革命家）の『ロシア革命史』なんて6冊もあるでしょう。トロツキーって何だろうって、トロツキー全集の十何冊、全部読みました。

僕は社会党青年部の討論集会で文章を書くわけです。トロツキーの言葉が出てくるんですね（笑）。そうすると社会党の指導部の連中は「こんな難しい文章は読めない」とか言って、僕を攻撃の材料にしていました。例えば「腐朽する資本主義」。トロツキーの何かにあったと思いますが、僕が青年部の全国討論集会の基調方針とかに「腐朽する何々」と書いて出すと、それが社会党の中央本部で問題になる。執行委員会で問題になるんですよ。「社会党本部の書記局で高見が書いている文章は社会党の方針とは違う」という。

それで集中攻撃を浴び、1回執行委員会で討論して、こういうことがありました。執行委員会で「高見の文章は問題だ。腐朽する資本主義打倒とか、あんなことは分からない」。しかし、全国にも配っている文章ですからね。それで国民運動局長の伊藤茂（本誌673号、674号参照）とか、笠原とか、当時の労働局長は鈴木と言ったかな、執行委員の5～6人が集まり、高見の文章を修正する会議をやる（笑）。書記局が私一人に対して。それで論争して、僕は論破するわけです。だから、理論的に僕を批判できない。「トロツキーの腐朽する資本主義というのは何が悪いのだ！」とやると、それに反論できない。「そういう過激な言葉は使わなくてもいい」とか、くだらない批判をしてくるわけです。「全くこいつらはだめだな」と思った。

あのときは労働局長の鈴木と言ったかな、国労（国鉄労働組合）出身の。「こういう難しい文章は、俺は分からん」と言いました。執行委員ですよ。そんなのが何で執行委員をやっているのだから、僕は軽蔑しました。そういう調子

でバンバンやるものですから、とうとうあの文章を直すことがほとんどできなかつた。ただ、うちの書記局から参加していた小野君が「ここを修正しましょう」と言うので、「そんなものはどうでもいいから、ああ、いいよ」といって2～3字変えただけです。だから、僕の文章をとうとう否定できなかつた。そういうこともありました。

——いま言われた小野さんというのは、小野政武さんですね。

高見 そうです。早稲田の文学部出身。

——高見さんが反戦青年委員会を編まれた段階で、ちょうど全国反戦青年委員会の事務局員をされていたと記述されています。

高見 ええ、事務局担当ですね。

——たぶん今の話と関わってくるのだと思いますが、青年部の中で構革派として活動されたときに、憲法公聴会のところで協会派と解放派の諸君に集中的に批判されたとあります。

しかし、先ほどの話だと、このころから佐々木さんとはわりと同志的というか。

高見 同志です。憲法公聴会阻止闘争は、佐々木君と僕が執行委員会でただ2人、闘うと決め、僕らが独自にやるというてやったのです、デモをやってね。

——それでもデモのやり方をめぐっては……。

高見 ええ、デモのやり方をめぐって対立がありました。つまり、デモをやるときには警視庁の警備とちゃんと相談してやるわけです。それで僕は、デモの行進はちゃんと警視庁の警備と相談して決めるということを主張した。そうしたら「それは右翼的だ」とか、協会派の連中は「そんなのはけしからん」とか(笑)。だって、デモのコースを警視庁と決めなければ、デモ自体が許されない。デモができないんですよ。そういうことが争いです。つまり、「高見憎し」ですな(笑)。「高見憎し」だけです。内容的に

別に彼らは何にも批判できない。公聴会阻止闘争は賛成せざるを得ないから。その戦術をめぐって対立となるわけです。

——そういう関係はあったけれども、その後、佐々木さんとはずっと良好な関係が続き、反戦青年委員会を結成する段でも……。

高見 反戦青年委員会結成のときは佐々木君とは何も相談しません。

——何も相談なしですか。

高見 全然。僕は反戦青年委員会をつくって相談もしたことがない。つまり、本に書いておきましたが、反戦青年委員会をつくった基本は、私が社会党青年対策委員会の責任者でやっていますから、総評青年部の生きのいい諸君を集め、討論をして決めたのです。だから、反戦青年委員会をつくるときには佐々木君たちは支持している。そういう点では、佐々木君とは非常に親密で、同志相身互いに尊重し合うという関係でした。彼は死にましたが、葬儀も私たちがやりました。500人ぐらい集まりました。

——今の質問に沿う形でさせていただきたいと思います。『インパクション』145号(インパクト出版会、2005年)で、「『護憲』から革命へ、そして新たな『改憲反対』へ—運動史のなかで」という、高見先生と^{あまのやすかず}天野恵一さんとがインタビュー形式でお話されているものがあります。

その中に今日の話のエッセンスもかなり入っていて感慨深かったのですが、これを読んだ私の感想としては、高見さんという方は現実の課題に正面から実践的に向き合い、その中で理論を探る人ではないかと思って今日は臨んだのですが……。

高見 私もそう思っています(笑)。

——これを読んでの僕の感想は外れていなかったと思います、非常に感慨深いものがあります。

その上で、これは後知恵的な質問ばかりで大変恐縮ですが、泣いて馬鹿を斬られる70年まで、高見さんが機関紙『月刊社会党』に折々に書かれた論考を見させていただく中で幾つか質問をさせていただきます。一つは1965年。

高見 反戦青年委員会をつくった年ですね。

— ええ。佐々木慶明さんとは、組織とか思想とかとは別に、本当に人間的な愛を含めてあったとお聞きしたのですが。

高見 そうですね。

— 同時に1960年結成の社青同は、高見さんは書記長として第4回大会に臨まれた。

高見 そうです。

— 非常に俗っぽい図式的な割り切りで申し訳ないのですが、高見さんが書記長で率いていた社青同と構革派が率いていた社青同の執行部、これがいわば原案はそのまま残すのだけでも、その原案は事実上、否定する修正案が可決された。そういう形をもって社青同の執行部が総辞職する。その総辞職の直後、『月刊社会党』の中で、「我々はなぜ総辞職したか」という高見さんの論考と、その執行部の辞職を受けて新しく執行部に就いた立山学さんの「社青同第4回大会と今後の課題」というものが、それぞれの立場から出ているわけです。

形の上では原案が否決されたわけではなかったもので、その時点で必ずしも総辞職をする必要はあったのか。総辞職をした、その判断です。大昔のことで申し訳ないのですが、『月刊社会党』を見ても、原案はそのまま生きている。

高見 私が書いた原案ですからね、総括方針の。

— 事実上それを否定する提案が、東京地本の2代議員から出されてきた。

高見 ええ。

— 後の社青同のことを考えてみれば、とりあえず高見さんはそこで、社青同の執行部を手

放すということは……。要するに、やめないほうがよかったのではないかというところですよ。後知恵で申し訳ないのですが。

高見 そうですね。あのときの正直な気持ちと内容を申し上げると、確かに運動方針か総括文章に対し修正案を出されたのです。一番問題なのは改憲組織、それから合理化に対していかなる態度をとるのかということでした。そうすると、三池闘争を受けて新しいエネルギー産業の転換点でしたから、合理化についてどういう方針を出すのが全部問われていた時代です。だから、はっきり申し上げて、あのときにいろいろ討論して出したのは、合理化については絶対阻止の立場ではないのだということが私たち構革派の方針でした。そういうところがあったと思います。だから、そこを突かれた。「やはり合理化は1から10まで断じて許せないという方針にすべきだ」という意見だったと思います。

そういう方針に基づき、どういう文章だったか僕は忘れていて分かりませんが、執行部の方針に対決することとして採決で修正案が通りましたから、私は正直に執行部を辞職すると決めたのです。つまり、総括なり運動方針なり、非常に大事な、核的な合理化問題が否決されたら退くのは当然だということで、かなり強く総辞職だと主張し、みんなしょうがないということになったんですよ。

— そうすると反合理化闘争をめぐっては、構革派はわりと合理化はケース・バイ・ケースというか、いい合理化もある。原案の中でそのような方針であったわけですね。

高見 でしょうね。

— 協会派や後の解放派は、いやいや、合理化は絶対阻止する。それが可決され、屈辱的なというか、辞職されることになったのですが、もう高見さんとしては、構革派の方針のほうが間違っているのではないかという思いも、この

ころから徐々にあったのですか。

高見 ええ。どういう文章だったか記憶が定かではないのですが、守るほうの文章は私が書いています。しかも、だいたい佐藤昇さんとか、ああいう構造改革派の理論を背景に僕は書いていますから、合理化については必ずしも絶対阻止とは考えていないところがあったと思います。

—まだこの当時でもということですね。

高見 ええ、当時ね。そういうところがあり、それを突かれて合理化。多数決で決めますから、やはり私たち執行部の出した方針が否決されるわけです。まあ、妥協の方針もあったのだと思いますが、妥協など考えないから、「俺はもう執行部を辞めた！」という気持ちが強かったですね。

—何十年も前の話を聞いて恐縮だったのですが、高見さんの思想は一貫しているなどというのがここから見えてきたわけです。先ほどの平和友好祭の問題にしても、高見さんは非常に幅広く……。そして、党とか組織にとらわれなくて判断するじゃないですか。

高見 統一戦線、人民戦線です。

—この『月刊社会党』を読むと、社青同の4回大会はそういう色彩に対する協会派と解放派連合の、生産点一元主義からの批判だった。僕はそういう読み方です。というのは、高見さんご自身が書かれた中で、「生産点での反合闘争さえしておればひとりで労働者は団結し、資本主義の打倒を信じ、そのために献身的に闘うことを誓った活動者が生まれるというのは近視眼的だ」というのがあります。現に、三池を闘った灰原茂雄（1915～2000年）書記長自身が、「生産点における抵抗を強化するために、地域、炭鉱の場合には集団住宅、こういう反独占闘争が日程に上らなければ、生産点の闘いだけでは尻抜けだ」。だから高見さんが後に別の『月刊社会党』に書くように、サークル活動を

重視するとか、職場だけではなく地域を重視するとか、そういうことで反戦青年委員会に結実していくような、諸党派が党派にとらわれなくて共闘できるような場ですね。幼いころにご父君から受けた広い意味でのそういうものを含めてやっていくのと、ガリガリの理論先行の生産点重視主義。そういう大きな相違があったのではないかと思ったので質問させていただきました。

高見 ありがたい評価ですが、解放派および協会派の連合による合理化問題における路線の対立は、あそこ非常に鋭い討論をしていました。そういう討論の過程で、修正案が可決することにより私の出した方針案が否定されるわけですから、当時の構革派の執行部として敗北した。私はそう思いました。

合理化については今でもまだ論争の過程で、エネルギー産業の合理化についてはどうするか、次の展望を出せと言われてもなかなか出せないことがあります。そういう意味では私自身も実践的にはまだ弱かったし、理論的にも弱かったという気はします。しかし、気持ちとしては、負けたのだから執行部が退くのは当然だというね。何か非常に素朴な、いわゆる民主主義的思想です、僕は。負けたらそれにしがみつくと必要はない。こちら悪いかもしれないし、潔く執行部を渡して退けばいいじゃないか。そのとき、私はそういう気持ちが強かったですね。だから、採決で負けても悔しくも何ともなかった。そのときはね。そういうことがあっていいと思っていました。

—お話の中で、『根拠地』で総評のやり方をかなり批判したとか、江田書記長を弾劾したとかいうことがありました。党派にこだわらないという高見さんの思想があるわけですが、社会党そのものに対する高見さんの考え方はどうなのか。つまり、どこかの文章で社会党の解体を求めたとかいう表現があったのですが、その

辺はどうでしょうか。

高見 僕は社会党の中でもだいたい意識していたのかと思うのですが、連合戦線党だと思っています。だから、一つの思想で固まっている党派ではない。

—それは共同戦線党という考え方とは違うのですか。

高見 共同戦線党ですね。共同戦線党という性格を持っている。いろいろな派閥があるじゃないですか、色合いが。河上さんや浅沼稲次郎さんの場合は民主社会主義、協会派はマルクス・レーニン主義。それから、和田博雄さんの場合は政策論を大事にされる流れです。ほかにもいろいろありました。それぞれの長所、短所があったと思いますが、それが一つになり、国民のための政党である連合戦線党として成立しているのがいいのではないかと考えています。それが今、だめになった。バラバラになってしまった。

頭でっかちの路線で一つの党にまとまることになると、これはスターリン（ヨシフ・ヴィツサリオノヴィチ・スターリン。1878～1953年。ソビエト連邦共産党指導者）の党と同じになってだめだと思います。自分の過ちの自己批判は絶対しない。スターリン主義の原発に対する態度もそうです。「昔から共産党は原発に反対してきました。」と嘘ばかり言っているでしょう（笑）。嘘なんですよ。ソ連の核実験は賛成だと言っていたのですから。自己批判をしないでそんなことを言う。大衆はやはり見抜いています。昔の人は知っているんですよ。大衆に対し本当に誠実な態度を、党派というのはやはりとらなければいけないと思います。そういう意味では、それぞれの党派も社会党の連合戦線党も全部問われて、私たちも問われてきたと思います。

—70年に社会党を除名されるわけですね。その後は社会党とのつながりは特になかったのですか。

高見 ええ、社会党との党籍のつながりはなかったですね。

—いま言われたような共同戦線党的なあり方、あるいは連合戦線党的なあり方、そのこと自体は評価されるわけですよ。

高見 そうですね。

—70年に除名されて以降、その見方はその後もずっと変わらない。

高見 まあ、そうですね。連合戦線的な見方を持っていたけれども、今の社民党を見ているとそのようなもっていないし、僕は解答が出ないですね。ただ、今度の細川護熙、宇都宮健児他が争っている選挙（東京都知事選挙。2014年2月9日。当選者は元厚生労働大臣の舛添要一）。細川をやるか、宇都宮をやるか。原発闘争をやってきた内部で対立があります。みんな困っています。それでこの間、弁護士の河合さんと帝国ホテルのそばで会議をやって署名し、そこで統一しようという文書を出したのです。それはなぜかという、本当にみんな困っていると言っているからです。たんぼぼ舎（「脱原発と環境破壊のない社会」を目指す反核団体・市民団体。東京都）の柳田さんも、「とにかくうちの組織は30年近く原発闘争をやってきて、宇都宮さんに走るやつはもう走っている。それではだめだ。細川の支持もある」。細川を支持する人が集まったんですね。柳田さんもだいたい細川支持のほうだったのですが、そのように困っている。だから、共同戦線的にもなかなか難しいなと私は思っています。

ただ、僕は「スペース21」という組織で昔の反戦仲間と機関紙を出したりしていますが、やはり激論しました。細川か、それとも宇都宮さんか。「下手すると漁夫の利で自民党が勝つかも说不定。だから何とかまとまらないか」という意見もありましたが、最終的にはどちらか1本にまとめることができなかつた。最終的

には、「もう自由にやろう。細川を支持したいなら支持したらいいじゃないか。宇都宮さんをやりたいというのだったらやったらいい。お互いに悪口を言わず、対立しないでそれぞれやろう」という結論を出し、それで今、やっています。

*

—もう20年ぐらい前のことですが、村山富市内閣が防衛面でだいぶ政策転換をしました。砂川の反対闘争などに積極的に関わられた高見さんから見て、元村山内閣総理大臣秘書官の前で言にくいかもしれませんが（笑）、あの村山内閣の防衛面での政策転換についてどのようにお考えでしょうか。

高見 そうですね、あれは政治の流れですから。村山さんが何か突然ね。あれは党の大会で決める内容です。「自衛隊合憲だ」でしょう。それから、「日米安保を認める」でしょう。その二つは社会党の基本的な路線として闘ってきたものですから、それを一挙にひっくり返されてしまって、僕らは戸惑いましたよね。何でこんなことになるのだと思いましたが、議会政治の流れの中でそこへ追い詰められたのだと思っています。

僕は村山さんがああいう路線を出されたことに、基本的には批判があります。社会党の基本路線を踏み外したのではないかという思いは、なおあります。しかし、総理大臣になられて、従軍慰安婦の問題から歴史的な意識の問題で出された村山さんの態度は、僕は立派だと思っています。そういう点は、やはり支持しています。河野洋平さんもそうですが、支持します。

—いずれあのようなになるのは時間の問題だったということですか。

高見 いや、あれを認めるわけにはいきませんよ、僕は。村山さんが突然ね。大会も開かないで。本当なら大会を開いて喧々諤々討論

して、修正案をつくるならつくったでやればいいと思います。あの方針を出したのは頭ごなしでしょう。討論していないわけです。民主主義の党としては、あんなことは自殺行為だと思っています。党内民主主義を追求していないですよ。連合戦線党の基本は、徹底した民主主義ではないですか。他党の批判もできないと思います。

—昨年ですか、総評会館で社会党のOB会をやりました。そのときの私の発言が、「ヒゲの昔党員が執行部を弾劾した」といって「週刊新潮」に大きく出ていました。目の前に村山さんや伊藤茂、それから曾我祐次さん（本誌664号、665号参照）たちがいるわけです。「僕はしゃべらないよ」と言っていたら、土井たか子（1928～2014年）の秘書の五島昌子さんが「高見さん、何とかしゃべってよ。発言してよ」と言ってきた。「いや、俺はだめだ」と言っていたら、司会者が「高見圭司さんの発言をお願いします」と言ってしまった。しょうがない。逃げるわけにもいかない。目の前に村山さんたちがいるのに失礼にも、「私は元社会党員で、反戦パージということで13人の同志とともに除名されました。ただし、そのうちの1人は党員でない人間が入っていました」という話をしたら、ワーッと笑われていましたけどね。党員でない人間まで除名している。

あのときの除名は、やはりお粗末だったので、本当にお粗末な執行部の態度でした。そういう執行部はよくないですよ。やはり大衆は信用しないです。だから、松岡洋子さんとか、ああいう立派な婦人会議の議長さんをやった人たちが、あそこでドーッと社会党を支持しなくなったのですからね。あれからです、社会党が衰退してきたのは。大衆に対し誠実ではない。戦争反対だと言ったのが憲法9条を認めないなんていうことを言ったら、どうですか。学校の

僕らの先生はやはり憲法9条を守ると教えてきたでしょう。その先生たちが、あの9条はいらないのだ、安保は必要なのだというようなことを言ったら、もう子どもたちは信用しません。あれはそういう自殺行為をやってしまったと思います。

そういうことで僕は、だいたい社会党はこういことだからだめなのだ。例えば、フランスのミッテラン大統領（在任1982～95年）を見てみる。ミッテラン大統領は、ゲバラの同志でボリビアの山中で一緒に戦った、フランスのジャーナリストで大学教授だったレジス・ドゥブレ（1940年～）をフランスへ呼んで、ミッテラン政権の国際担当をさせたじゃないか。どうしてそういうことができないのか。それでもミッテランは闘い、社会党は闘った。今でも大統領を取りましたからね。社会党はああいう道があったのです。それを自分で消してしまった。だから社会主義協会などが、マルクスがこう言ったとか、どんなに立派な理論を言ったってだめなんです。やはり現実の大衆の生活や思いをね。口で説いてもだめです。ああいうときに問われるわけですからね。だから大失敗をした。

それでも僕は、本の中に書いていますが、本人も悩んでいたようだけど福島瑞穂さんが党首になった大会で、大会の代議員に私がピラまきをやったんですよ。どういうピラまきをやったかという、「社会民主党、頑張れ！」というわけで、3人でやりました。つまり、私はやはり社会党に思いがありましてね。批判はしたけれども、「社会党、頑張れよ」という支持の思いがあります。「かつての大衆を裏切るようなことをやってはいけない。それを最後もう1回反省してやってほしい」。そういう思いは今でも僕はあります。戸籍は依然として社会党ですから（笑）。

——『根拠地』のことですが、財政はどうなっ

ていたのでしょうか。

高見 カンパです。

——カンパは、社青同や反戦以外の社会党員とか、あるいは党幹部とか、そういうところにも支援を……。

高見 それはないです。党幹部とか、広い層でカンパをいただいたというのは……。青年部の連中とか、だいたいみんなカンパをくれます。

——一般党員から。

高見 ええ。雑誌ですから、月に2,000～3,000部、全国の本屋に出ているしね。

——軌道に乗る前の、最初の発刊のときは。

高見 発刊のときの立ち上がりのカネは何人かで。僕も何万円か出しました。やはり赤字続きでした。池袋の汚いアパートを借り、事務所にしたのですが、部屋代だって大変だった。みんなで出し合いました。でも、あれは長くなかったですからね。だいたい私たちが社会党を除名されて、その後はやっていません。赤字続きでした（笑）。

——あと1点。時代が飛んでしまうのですが、「新運転（新産別運転者労働組合）に加入」というのはどういうことですか。

高見 これは生活のためです。社会党本部で給料をもらっていたんですよ。社会党本部はあのころ、総評の書記局と同じで高給でしたからね。それがなくなるわけです。うちは子どもがまだ小学生、幼稚園がおりましたから、生活をどうするかをまず考えなければならぬ。だから悩みましたね、1年ばかり。まあ、何とか蓄えが少しありましたから、それでやりました。

新運転というのは日雇い労働者の組織ですから、誰が入ってもいい（運転手または作業員であれば、自営業の人でも1人で個人の資格で加入できる）。僕は免許証を持っていますから、「ああ、運転手で食うことはできるな」。最初はいい給料でした。運転手はなかなか賃金が高く、

ゴミトラ（ごみ収集車）からいろいろ……。僕は11トン車のミキサー車をやっていました。

——その免許も、もともと持ちだったのですか。

高見 いや、普通免許を持っていて、2～3年してから大型を取りました。

——新運転に入って仕事をしながら……。

高見 ええ、仕事をしながら教習所へ行って大型を取り、あの11トン車の大きいのを運転していました。だから、子どもが成長していく生活は何とかできました。ほかにどうやって食べるか、困りました。給料がないですから、本当に困りました。

でも、よかったですね。はっきり言って社会党の官僚じゃないですか、僕は。理屈は言えるけど官僚です。生の現場の労働者の気持ちを本当につかんでいないんですよ。うちの新運転東京地本西支部は500人の組合員で、大きいです。いま東京の新運転は全部で2,000人ちょっといます。大きい組織です。このうち、清掃車が1,000幾らいます。タクシーが300ぐらいかな。タクシーは、前は多かったですけど少なくなりました。それから、ミキサー車も少しあります。建設関係がだめになってからミキサー車はずいぶん減りました。

——原発でよくなっているじゃないですか。

高見 原発で仕事があるのかもしれませんが、あまりよくないですね。うちの組合員でミキサー車をやっているのは非常に少ないです。

でも、現場の労働者と本当にいろいろな話ができる。生の話ができ、私自身、人間が変わってきたように思います。やはり、現場労働者の問題意識は痛烈ですからね。給料をどうするかとか、時間外労働をどうするかとか、職場でいろいろです。新運転の組合の執行部は企業と癒着して、組合員から搾り取るような構造になっています。

だから、執行部追及の裁判を7回やりました。7回全部勝ちました。全面勝利です。法曹界で『判例タイムズ』（判例タイムズ社）があるでしょう。あれに私たちの勝利の文章が全部出ています。最初はかつての新運転の篠崎委員長を被告にした闘いをやりました。組合会館を建てたんですよ。これは組合のカネなのに業者のほうに渡してあった。それで我々は怒り、8人の原告団をつくりました。少数派です。この原告団の8人で闘い、2年ぐらいかかりました。裁判をやり、この裁判は地裁で勝ち、執行部のほうかもう1回高裁へ出してきた。高裁で闘い、高裁の最中に被告の篠崎氏が取り下げてしまった。それで勝利が確定したのです。この私たちの闘いは『判例タイムズ』に掲載されています。

——60年代の後半、まさに社会党からもう除名されるかもしれないと腹をくくる中で、『月刊社会党』の66年9月号に高見さんは青年対策委員会事務局長の名前で、「今の社会党の中で求められているのは中でも思想闘争。そして我が党の革命の武器を鍛え上げるために思想闘争が不可欠の要素だ。真剣に徹底的に、しかも党内における民主主義を前提として、公開闘争（公開論争）が展開されることが正しいあり方であろう」と述べられている。あるいは67年には、第一次羽田事件（佐藤栄作首相の南ベトナムを含む東南アジア各国訪問を阻止しようと10月8日、反日共系全学連の学生約2,000人が羽田空港周辺で警官隊と激しく衝突した）の評価をめぐるところですね。同じく高見さんは青少年局青年対策部長として、ここのところでは「反戦青年委員会の闘いを突破口として党革新の課題を追及して奮闘する。青年の戦線の統一を目指すとともに、党の革新の課題を追及して奮闘する」と述べています。こういう一連の問題提起ですね。党内の思想闘争の問題提起。それから、反戦青年委員会の闘いを突破口として

党も革新していくというふうに、一貫して党の自己刷新を主張されつつ、60年代後半、反戦青年委員会を引っ張る形をとっています。

高見さん自身が高見派をつくっていなくても、周りから慕われて高見派のようなものがつくられているし、こういうことを主張し続けている。私の推測ですが、そういうことも一つの引き金になり、反戦ページの一部幹部からは十分危険視され、総選挙での敗北の責任を反戦派におっかぶせるようなことにもなっていたのでしょうか。

高見 そうです。

——一連の、かなり突っ込んだ提起をされているようですが。

高見 私は反戦青年委員会をつくることから、一つは、大衆的にベトナム反戦闘争を闘い抜く。それから、60年の安保闘争および青年労働者を中心とする平和友好祭運動、職場の反合闘争も含めた闘い。こういう日本の政治を革新していく全体の闘いは結局、私は社会党の党员でしたから、社会党を変えるというところに結び付けていくことであつたのです。特に、私は総評労働運動の变革を言っていました。社会党を変えるというだけではない。思想闘争ということもありますが、やはり総評の下からの变革を遂げないと社会党も変わらない。そのように思っていました。だから、私の編著の『反戦青年委員会』は総評批判です。

——そうですね。

高見 ずっと指導部批判です。ああいう本を出すものだからね。江田さんは「あの本は素晴らしい。いいから持ってこい」なんて言われるものだから、江田さんも批判されていましたが、そういう意味では総評の变革、社会党の变革を結び付けて考えていました。それは反戦青年委員会を拠点にしながらやろう。それから、べ平連、全共闘も含めてね。おっしゃるとおり、

うまくいかなかったというのがあります。

——総評に対する批判は、具体的にはどういう内容ですか。

高見 太田薫さん（1912～1998年。労働運動家。1958～66年総評議長）がラッパでね。羽田で佐藤訪米阻止闘争をやる（第二次羽田事件。1967年11月12日）と言うでしょう。それから、ベトナムの何とかをやったらゼネストをやる（1966年10月21日、総評が秋期闘争の第3次統一行動として、ベトナム反戦を中心とするストライキを実施。48単産（産業別単一労働組合）約211万人がスト参加。91単産308万人が職場大会に参加）とか言うじゃないですか。やらないですよ。

——そういう運動に取り組まないことに対する批判。

高見 やらない。口だけです。ゼネストがそう簡単にできるとは思いませんが、日本の労働者、総評の指導部が、ベトナム反戦でゼネストをやる。だって60年安保のとき、国労はストライキをやったのですからね。本当に朝の出勤電車の中で私も身動きできないぐらいだったけれども、そのいつときに総評の労働者は、国鉄を中心に60年安保のストライキをやりました。ああいう闘争をやらないでいる総評の指導部は何だったのか。

——そういう政治的課題で具体的な行動に取り組まないことに対する批判。

高見 それもあります。政治的な行動と同時に、やはり職場の闘争も全部含めてですよ。

——戦闘性が低下している。

高見 そうですね。だから総評自体が、そういう大衆の心をちゃんと体して闘っていないのではないか。それが反戦青年委員会というところに表れてくるわけです。どんどん増えるわけです。

——戦闘性というものをそこで止めるという

ことですよ。

高見 そうですね。

——端的に言って、除名されたときの理由は何か明示されたのですか。

高見 ええ、理由は明示しました。どう言ったかな。統制委員会の決定文書があったのですが、社会党を解体するとか、そういう主張をしているとかいうことを書いていたように思います。

——その主張で除名できるのですか。

高見 いや、直接の契機はこういうことです。

——具体的な事実のようなものはあったのですか。

高見 事実があります。具体的な事実がね。実は、東京都本部の社会党大会があり、そこで壇上占拠を反戦派がやります。私は壇上占拠をやりたいなかった。反戦青年委員会がワーッと来て、「ベトナム反戦に東京都本部の執行部は一体何をやっているのだ」と指導部をガンガン追及するわけです、みんなが。会場が追及されてしまう。執行部はもう、どうにもできない。答弁ができないものですから、壇上に若い連中が飛び乗って自己批判を要求するわけです。それで最後に自己批判のときに、「こういうことを我々がやると、おまえはすぐ統制委員会にかけて俺らを除名するだろう。ここではっきり今日の討論で除名するとか、統制委員会にかけるとをしないと宣言せよ」と言って、委員長だったか書記長だったか、「そういうことはやりません」と宣言します。

ところが、その事実を、壇上に飛び乗ったやつ全部ではなく、誰と誰と誰というので適当に名前を挙げてね。先ほど言った佐々木慶明の名前があったけど、そこにいないんですよ、佐々木慶明は。いないのに名前を何人か挙げ、13人除名というのを統制委員会に提案する。

——13人というのは、壇上に上がったという、具体的な行動をとったことに対する批判に

なるわけですか。

高見 党員でない者まで除名するのですし、私は壇上に上っていないのです。反戦派の指導的な党員を選んだのだと思います。だから、党員でない者まで除名対象者にしたのです。

*

——昔に返り、民社分裂（1960年、日本社会党の西尾末広らが活動方針を巡る党内抗争の結果、離党して民社党を結成した）のころになるのですが。

高見 西尾分裂ですね。

——ええ、浅沼氏と西尾氏分裂のときです。確か、麻生良方氏はかつて浅沼稻次郎の秘書だったと思いますが、結局、民社分裂で麻生氏が民社党に行き、衆議院選挙で東京1区で争うことになりました。

高見 そうですね。

——高見さんは、その分裂のときの一部始終を何か見られていたのでしょうか。

高見 私はペーペーの一青年党員ですから詳しいことは……。ただ、青年部で討論したのは、やはり西尾除名です。つまり、安保は必要だという主張ですから。加藤勘十夫人のシヅエさんも「安保は必要だ」とやっている。「これは、社会党は許してはいけない」というのが社会党の見解で、青年部の圧倒的多数は西尾除名でした。

西尾末広さんは戦前から問題がありますけどね。経営者と癒着してやっていることがありましたから、西尾氏の安保に賛成だということについては明確にしました。あのときの社会党は立派だったと思います。浅沼さんも明確にしていました。あれからまただんだん左に行くんですよ。あのときはまだ社会党の中の河上派だったのですが、だんだん河上派から離れていきます。それで60年安保の前後から、浅沼さんはかなり左へ行き、中国へ行ってやった演説

が大問題になるのです。

しかし、僕は断固、浅沼さんを支持しました。「アメリカ帝国主義は日中両国人民の敵である」と演説したじゃないですか。僕は正しいと思っただ。あれでまた西尾派は「けしからん」と言っていた。河上派の中でも「けしからん」と言うのがいました。浅沼さんは非常に困っていました。委員長選挙は河上派との選挙ですから。河上さんと浅沼さんが出て。2人とも委員長に立候補して闘うわけです。麻生良方のお父さん、

麻生久は戦前の日労党（日本労農党）で、田中義一という陸軍大臣（後に総理大臣）と関係ができて、やはり問題があった人です。浅沼さんは日労党でしたから、苦勞したのですね。浅沼さん自身の深い反省があったと私は思います。

—まだいろいろ語り足りないところがおありだと思いますが、そろそろ時間です。どうもありがとうございました。

高見 どうもお粗末で申し訳ありません。

(完)

法政大学大原社会問題研究所 ワーキング・ペーパー（旧調査研究報告）のご案内

ワーキング・ペーパーは、教育研究機関からのお申し込みに限り、無料で配布しております。個人・一般の方には実費で頒布しています。入手ご希望の方・機関はご連絡ください。

No.	タイトル	発行年月
53	最新刊 持続可能な地域における社会政策策定にむけての事例研究 Vol.4—倉敷市政と繊維産業調査および環境再生・まちづくり調査報告—（500円）	2015年3月
52	持続可能な地域における社会政策策定にむけての事例研究 Vol.3—倉敷地域調査および桐生繊維産業調査報告—（500円）	2014年4月
51	棚橋小虎日記（昭和十八年）（500円）	2014年1月
50	持続可能な地域における社会政策策定にむけての事例研究 Vol.2—繊維産業調査および公害病認定患者等調査報告—（500円）	2013年4月
49	電産中国関係資料（300円）	2013年3月
48	協働会の企業調査資料（300円）	2012年4月

法政大学大原社会問題研究所 〒194-0298 東京都町田市相原町 4342
tel:042-783-2305 fax:042-783-2311 e-mail oharains@adm.hosei.ac.jp